

特別講演 1

「慢性腎臓病（CKD）患者の集学治療

～腎性貧血の新しい展開～

大阪府立急性期・総合医療センター 腎臓・高血圧内科 主任部長

椿原 美治 先生

2010 年末日本透析医学会の統計調査の速報結果では、既に 2 年連続で透析導入患者数が減少し、慢性糸球体腎炎による患者数も年々減少し、1996 年の 10,995 人をピークに 7,946 人となっている。また増加し続けてきた糖尿病性腎症も減少に転じた。これらは CKD 対策による、レニン・アンジオテンシン系抑制薬を第一選択とする厳格な降圧療法などを始めとした集学治療の賜と考えられる。

一方で、CKD 患者に伴う“腎性貧血”に関しては未だ認識の低いのが実情であり、末期腎不全患者や透析患者の話、と覚えておられる医師も多い。しかし、CKD 患者が 1,300 万人も存在し、約 100 万人が“腎性貧血！”と言われると話が違う。先生方が診療されている患者の中に必ず数名以上の“隠れ腎性貧血”患者が存在する事になる。“腎性貧血”治療の腎・心などの臓器保護効果が認められ、CKD の集学治療の重要な位置を占めている。

本講演では、CKD に対する集学治療を概説するとともに、長時間作用型赤血球造血刺激因子製剤(ESA)の新発売によって、容易となった“腎性貧血”治療に関して、2008 年に作成された「慢性腎臓病患者の腎性貧血治療のガイドライン」を紹介しつつ、その意義や、具体的な治療方法を述べる。